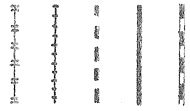


第
四
編

明治三十三年（四十歲）當時の博士

並に北海道鐵道線路の圖



空知本旭川線

北海道鉄道敷設法所定線

全上之内北海道鐵道會社敷設許可線

北海道炭礦鐵道會社懷内小樽線

全上之内夕張空知線



第一章 西伯利鐵道調査前記

一、博士西伯利旅行の真相

博士は如何なる國家的使命を帯びて急に北海道を去りしか

三十歳の若冠にして、世界屈指の大事業たる琵琶湖疏水運河を竣工し、次いで未開の富源を開發すべき延長一千哩の北海道官設鐵道の敷設工事に銳意努力しつゝ、ありし壯齡四十歳の博士は、そも何によりて急に重要な任地を去るに至つたのである歟。不知我が帝國は如何なる國家的使命を博士に齎らし、如何なる學術的任務を博士に寄託したのである歟。

乞ふ事實をして有りの儘に、當時のそれ語らしめよ。博士は明治三十三年二月を以つて休職の辭令を得、札幌を引きあげて東都に歸り、三月末に及んで臨時北海道鐵道敷設部長たる本官を免せられた。而して翌四月二十八日博士は露語に通ずる簾藤三平氏を伴ひて東京を出發し、五月九日長崎に着くや、直ちに露國航路の便船に塔乘し、釜山及び元山を經、五月十七日浦鹽斯德ウラジオストツクに到着して居るのである。平生一舉手一投足を苟もせざる博士にして、此の際に於ける行動の何ぞ遽々然と

博士の露西亞行

して斯くは慌しき。然も一時其の本官を免せられたるは、新たに博士の任命せらるべき京都理工科大學教授としての鐵道講座用に資するため鐵道視察の必要より出でたるものと稱し、博士自ら其の視察旅行が自己の意志に基き、全く政府と關係なきを辯明するに努め居たる如き、前後の事態愈出で、愈奇。

博士の行
や斷じて
尋常煙霞
の客たる
にあらす

加之博士の旅行たるや、尋常煙霞の客たるにあらずして、當年露西亞政府が東方經綸のため巨億の財を投じて敷設しつゝありし西伯利鐵道の實狀を視察し、此の新線によつて、浦鹽斯德より莫斯克モスクワに赴かむとせしものでないか。當時にありては我が國の鐵道工學専門學者にして、西伯利を通過し露都に赴きたるものは一人もなく、博士の踏査は實に桂陸軍大臣太郎と大山參謀總長嚴の懇囑によると傳へられる。又、それかあらぬか、博士が東都にありて出發の準備中、急に免官の辭令をうけたるは、三月末の某新聞に我が政府は或る祕密調査を博士に依頼したとの記事の掲載せられたるによるとも傳へられて居るのである。

他人有心
予付度之

語に曰く、他人有心予付度之と。遮莫、今より溯りて其の事の眞偽如何を判するに、は西曆千九百年即ち當年に於ける東亞の形勢を觀、我が國の對露關係の何狀なりしやを尋ぬるに如くはないであらう。

二 露國の極東侵略史回觀

露國東漸
史の回觀

それ、大露西亞が東漸の雄略を定むるや、斷じて一旦一夕のことでない。史を按ずれば、遠く第十六世紀に其の端を見るを得べく、彼の東歐を震撼しつゝありし蒙古韃靼の勢威衰微するに及んで、イワン第四世の時、イイマルクは恰薩克兵五百を率ゐ、ウラル山を越えて西伯利に進出せしに始り、同年代以降、露人の侵略は頓に熾烈となり、第十七世紀に到り、滿人によつて清朝の創立せらるゝに會し、之が反擊を受けて一時其の勢ひを阻止せられたが、時なる哉、西曆千八百六十年、清の咸豐十年、英佛聯合軍によりて北京陥落に際するや、露人は漁夫の利を占めて、烏蘇里の地を清より割讓せしめ、其の地の南端に當る良港浦鹽斯德を擲得することゝなつた。而して露國と我國との交渉を生ぜしは、これよりさき、實に第十七世紀の末年にありしを記憶せねばならぬ。

西曆千六
百九十九
年露人カ
ムチャツ
カを襲ふ

それは西曆千六百九十九年のことであつた。此の年露人アトランフは多數の恰薩克兵を引率して、カムチャツカ半島を襲ひ、此の際アトランフ河にて土人の拘禁せし一日本人のあるを見、翌年七月、之を國都莫斯科に拉し行きたる事實は、史乘に

露國我が
幕末の衰
勢に乗ず

傍若無人
なる極東
政策

明なるところ。次いで、第十八世の初年^{ペートル大帝}彼得大帝の時代に於いて露人はカムチャツカより出で、更に千島を侵略し、我が國の北邊^{これより}急を傳ふるに至つた。⁽¹⁾これがため憂國の士林子平は、海國兵談を著して北冠の恐るべきを論じ、其の他志士學者、また争うて對露政策の忽せにすべからざるを説き、更に文化年間に於ける露人の北地暴行と文久元年の露艦對馬襲撃とは、彼の包藏せる野心の如何に恐るべきかを想はしめ、舉國騷然の狀を示したが、幕末の衰勢如何ともすべからず、遂に明治八年に及んで樺太⁽²⁾全島は露國の有に歸し、彼は我が國民の胸裡に抜くべからざる憤懣の情を植ゑつけた。爾來二十年、彼は日清戰後に當つて三國干涉に參與し、傍若無人なる極東政策は一層赤裸々となり、明治二十九年には清を脅して關東半島の租借を強ひ、韓國を壓して我が國に迫らしむるなど、其の政略の倨傲にして其の行動の不遜なる、若し當年其の現状の儘に放置せむか、我が國運は彼の鐵腕のもとに壓迫せられて、邦家の前途轉た累卵の危きより危うかつたのである。

⁽¹⁾當時の日露の關係の事情は、教育學術研究會發行の「露國研究」中、煙山專太郎氏執筆の「日露外交」を参照するを便宜とする。

⁽²⁾樺太割讓問題は明治初年に於ける日露關係を背景として起つた不祥事である。前掲露

國研究を参照せられたならばこの邊の事情は明白である。

三、西伯利鐵道工事概観

關東半島の租借と西伯利鐵道

露國政府の清より關東半島を租借せし最も重大なる政治的意味は、半島所屬の港灣を西伯利鐵道に聯結し、軍事的經濟的大動脈を布かむとするにあるや謂ふまでもない。抑西伯利鐵道は露國サマラ、ツラトウスト鐵道線の東方極端に位置するチエリヤビンスクに始まり浦鹽斯德に達する一大鐵道線路であつて、其の起工はアレキサンドル歷山三世の治世たる西曆千八百九十一年(明治二十四年)のことにして、此の年、皇太子(後のニコラス二世)は父帝の詔勅を受け、我が國巡遊の歸途浦鹽斯德に至り、親しく該鐵道線路に第一石を置きたるに出づ。皇太子は即位の後も父帝の遺志を繼承し、其の竣成を望むや切。勅を下して工事關係諸員を激勵するに至り、此の空前の大工事は、年一年驚くべき速度を以つて進行した。

西伯利鐵道工事進捗の速度
一ヶ年の竣工成績
約三百八十哩

即ち明治二十四年に浦鹽斯德より、翌二十五年にチエリヤビンスクより各着手し、明治三十二年の末に於いては、バイカル廻岸線及び黑龍江沿岸線を除き、凡そ三千四百哩を僅に前後九ヶ年間に落成せしめ、其の一ヶ年の竣工成績は平均約三百八

大鐵道線
の威力

十哩に相當せるが如き、所謂歐亞の平和促進の美名を冠せる此の大鐵道線の工事進行の程度は、實に彼が大膽不敵なる侵略政策の發展に並馳せるものであつて、鐵道それ自身の實際上の能力は明かならざるも、我が國は朝野を擧げて彼が東進南下の猛勢に寒心するの外はなかつた。試みに思へ、此の大鐵道工事落成の曉には、強露數百萬の兵力はたちどころに我が一葦帶水の隣邦に集中せられ得るのであるを。座して彼の挑戰を俟たむ歟、進んで彼を邀へ撃たむ歟。皇國興廢の機は、斯くて日一日緊迫し來る。明治三十三年の形勢は即ち將に之。あゝ極東の風雲斯くの如き秋、我が田邊博士は、一身の安危を顧みるの暇なく、家を捨て祖國を離れて、遠く異域萬里の征途に上る。問ふ勿れ彼の使命や如何と。博士當年の心事やまた悲壯なりと謂ふべしである。

①西伯利鐵道敷設工事の起原並びに起工後、明治二十三年迄の狀況に就いては、田邊博士が明治三十五年二月に出版せる「西伯利鐵道」の第二篇の記述によつて當時の事情を明かにすることが出来る。

極東の風
雲急なる
に際し博
士萬里の
征途に上
る